

【本書の特徴】

本書収録の時代一九五五―一九六四年は、戦後の日本が状況を立て直して新たな文化を实らせていく、東京オリンピック開催までの期間にあたる。

新人作家たちが新たな活動領域を作り出し、新世代の批評家たちが彼らを評価して、美術ジャーナリズムの新機軸が生まれた。国際展への出品や海外作家や批評家たちとの交流も盛んになっていく。

当時のドキュメントをできるかぎり精査して編んだ本書の全十一章は、従来の通史を見直して「現代美術」への多角的な視野を開くための最良の手引きとなるだろう。

●雑誌と同人誌を中心に、展覧会開催時のパンフレットや私製配布物などエフェメラを含む資料を、原文のまま全文を収録。書誌資料も充実。

●刊行委員会メンバーが長年にわたり調査を行い、すぐれた批評性や歴史的意義の認められる資料を選定。

●約三〇〇の収録文献を十一章に編纂し、解題とともに集成。

●人名・事項別の充実した索引が、各章を横断する多層的な読み方を可能に。

●重要資料の網羅による大著ながら、実際の研究・読書に利便性を備えた編集とデザイン。

【本書をお薦めする方々】

大学・公共図書館、美術館・博物館、

美術史・美学・建築史・思想史・比較文化研究者

美術批評集成 一九五五―一九六四

編著者＝熊谷伊佐子（元東京都現代美術館学芸員）、林 道郎（上智大学国際教養学部教授、藤井亜紀（東京都現代美術館学芸員）、

松井勝正（東京造形大学・武蔵野美術大学非常勤講師）、光田由里（多摩美術大学教授）

判型＝A4変形判280×210mm 上製＝総頁九九二頁 定価＝本体四〇、〇〇〇円＋税

ISBN 978-4-904706-09-1 C3070



- お客様各位 弊社は直販のみの販売システムです。ホームページ・メール・ファックス・電話・はがき等で直接ご注文下さい。振込用紙同封の上、商品をお送りします。また書店にご注文される場合、書店様から弊社へ連絡いただけますようお願いいたします。
- 書店様各位 弊社は直販のみの販売システムです。ご注文の場合、ホームページ・メール・ファックス・電話にてお問合せ下さい。条件等ご連絡の上、納品させていただきます。

批評が拓く美術を知る

批評を通して通史を見直す

批評の真髄に迫る

美術批評集成

一九五五―一九六四
An Anthology of Japanese Art Criticism: 1955-1964

編著者
Editors:

熊谷伊佐子
Kumagai Isako
林 道郎
Hayashi Michio
藤井亜紀
Fujii Aki
松井勝正
Matsui Katsumasa
光田由里
Mitsuda Yuri

藝華書院

2021年
6月刊行

刊行にあたって

本書は、戦後美術史研究および文化研究のための資料集として出版される、日本の美術批評のアンソロジーである。収録の対象としたのは、一九五五―一九六四年のあいだに日本で出版された日本語の美術評論で、座談会、作家たちの文章も含めて、同時代の日本の美術に対する発言のうち、すぐれた批評性及び歴史的な意義の認められるものを集めた。各文章の発表媒体は、美術雑誌、新聞の文化欄をはじめ、同人誌、展覧会の配布物等多岐にわたる。

これらの文章のうち、後に単行本に収録された文章はごく限られ、廃刊になった雑誌、様々な機関誌、各種ニューズレターはもちろん、案内状や宣言文など非定期刊行物（エフェメラ）は現存部数も僅少で、手に取ることが困難なものも多い。今となつては、オリジナルを個人的に収集するのには限界がある。当時は関係者にある程度共有されていたこれらの情報を、われわれ研究者も共有したいというのが本書編集の動機だった。

編者は二〇〇四年から活動を始めた現代美術研究グループである。毎月一回、すぐれた批評の文章を持ち寄り、討議を重ねるうちに、批評集成の必要性に思いついたり、編集のヴィジョンが浮かび始めた。ひとつには「アンフォルメル」「反芸術」「アンデパンダン」など、美術史上で重要なトピックを立てて、それに関わる批評文を集めることから調査を始めた。重視されているトピックに必ずしも重要な批評がともなっているとは限らない。読まれるべき批評文が集まらないため、トピック自体をあきらめることもあった。もう一方では、主要美術雑誌をはじめ各種雑誌類を年代順にくまなく追っていく調査を行い、逆に批評文の一群から新たなトピックを抽出する作業も行った。意義のある批評が見失われてしまった可能性も考え、トピックについての批評と批評文から立ち上げるトピックの二本立ての調査を行ったのである。後者はたとえば「戦後社会と美術」「アヴァンギャルドとリアリズム」など、左翼陣営からの美術批評を積極的に取り上げる試みにつながった。これらの章は本書の特長に数えられると自負している。近年は読まれる機会が少なくとも、彼らのやや難渋な文章には鮮明な目的意識と理想への希求があり、再評価されるべきと考える。集めた文章を繰り返し編み直し見直していくうちに、現在の十二章にまとめることになった。以上の理由から各章の性格は異なり、文章採択基準、本数、構成も章ごとに異なっている。評論家たちは美術専門メディアだけでなく、企業誌や文芸誌など多様なメディアに寄稿している。調査はできるだけそれらの多くをカバーしながらも、実際には専門誌以上に深い論議はほとんど見られなかったため、それらから採り上げたものは少ない。章によつては、建築やデザインなど隣接ジャンルの文章も収録したが、基本的には同時代美術領域を論じたものを採り上げている。

文献の採択については、批評性を基準にして判断しながらも、作業を進めるうちにそれだけでは章が成り立たないことがわかってきた。ひとつの批評の価値を理解するために問題の周辺情報が必要な場合もある。刊行委員会で討議を重ね、選択には多面的な判断を取り入れることにした。章の提起する問題群が理解されるよう浮き彫りにする目的で、資料的な価値、状況や背景の情報量に着目して選んだ文献もある。本書に対し、統一的な批評の選択の価値基準がないという指摘や、均衡を欠いているという感想もありうるだろう。ここではあえてバランスや統一性を目指さなかった。多彩な批評文のそれぞれの特長を活かすため、多層的でダイナミックな編集方針を選んだ。各章はもとより完全に独立したものではなく、相互に関連しあっている。ひとつの文献が複数の章に含まれるべき内容を持つ場合も少なくない。他の章への参照が必要と思われる文献については、各章解説文中にその旨を記した。

章の並べ方は年代順を基本に、各章間の関連を考慮して設定してある。各章の収録文献の発表年はオーバーラップしている上、ひとつの章の収録文献の年代幅もまちまちである。巻末には章を解体して、発行年月順にフラットに並べた収録文献一覧を付記したのも、こうした多層的な章立てを仮のものとし、別角度からも各文献を読むことを可能にするためである。資料集として、本書が開かれた読み方を呼び込める場でありたいと願っている。

美術批評集成刊行委員会

- 戦後日本初、待望の美術批評アンソロジー。
- 批評性の高い文献・資料を遍く渉猟してこの一冊に集約。
- 新聞、雑誌、同人誌、機関誌、展覧会パンフレット、私製配布物など今日入手困難なエフェメラを含む貴重資料を、原文のまま全文収録。
- 全十一章に分類編集された動向・潮流を読み解く分かりやすい解説付き。
- 総執筆者一八〇余名、収録文献約三〇〇件、人名索引約二六〇〇人、事項索引約二五〇〇項目

- 目次
- はじめに 光田由里
- 第一章 戦後社会と美術 章解説 熊谷伊佐子
- 第二章 アヴァンギャルドとリアリズム 章解説 熊谷伊佐子
- 第三章 アンデパンダンという場 章解説 藤井重紀
- 第四章 アンフォルメルをめぐる 章解説 林 道郎
- 第五章 伝統 切断と変換 章解説 松井勝正
- 第六章 国際化をめぐる諸問題 章解説 林 道郎
- 第七章 反芸術 章解説 藤井重紀
- 第八章 ジャンルと制度 章解説 松井勝正
- 第九章 美術批評について 章解説 光田由里
- 第十章 作家論 章解説 光田由里
- 第十一章 宣言文と作家のことば 章解説 光田由里
- 事項索引
- 人名索引

2021年
6月刊行

左…原寸大見本

1 批評とは何か

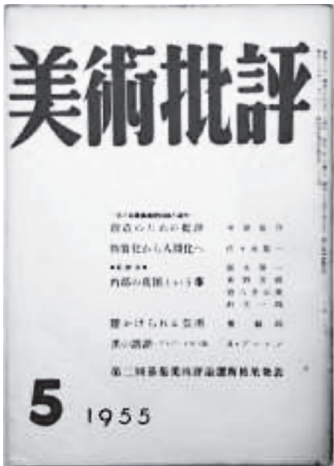
『美術批評』一九五五年五月号

募集美術評論人選考

創造のための批評

中原佑介

——われわれは慰めるために語るのではなく、建設するために語るのだから。——（ジャン・マルスナク）



『美術批評』1955年5月号表紙

最近、瀬木慎一は暗喩について述べたところで、アラゴンの——私が樹といえは……それは、一本の樹のことであり、パンといえはそれはパンだ——ということばを素朴に受け取ることを、とんでもない独り合点だと書いています。（美術批評・五五年・二月号）一つの物がそれ自体としてとらえられるのは他の物との関係が充分に分析され、暗喩が完全に成立したとき以外ではないのだ——という彼の認識のしかたがその裏付けになっているのですが、ぼくはパンといえはやはりパンだとしか理解できません。フランスの雑誌《ポエジー45》で、ピエール・エマニュエルが——そのリズムをわれわれのリズムに合わせようとつとめてい

1 批評とは何か

る民衆と直面して、これと対話の気持をそえる機会が今あたえられているのだ——と述べたことに感動するのは、よくある外国のことだからというのではなく、詩人が「それと交替すべき何らの革新が未だ到来していない」（ルネヴィル）ほどに決定的な勝利と支配を続けていた象徴主義から脱出し、詩の形而上学的概念を放棄して、民衆とつながることばの単純さを貴び、ことばの建設に努力した歴史的な正しさに対してに外なりません。「二に二をたせば四」というのがことばの健康さであれば、「民衆の立場」にたつあたらしい批評家の仕事のひとつはことばの病気を癒すことにある筈です。スターリンにおよぶまでもなく、「われわれの思考はわれわれの言語以上には値しないし、人は思考が言語で使用する仕方にもついで思考を判断すべきである。もしわれわれが言葉にたいし言葉の力を回復させようとするならば、二つの操作をする必要がある。一方では言葉からその偶然の意味を払い除ける分析的清掃、他方では言葉を歴史的状況に適合させる総合的拡張」（サルトル・文学とは何か）であれば、あたらしい美術批評に対する難解さの指摘に対し、批評家はこれを黙過することは許されないでしょう。あたらしい美術批評の難解さは、単なる表現上の問題に限定されるのではなく、批評自体の性格に内因するものです。このことをも含めて、ぼくは現在の同時代の作家のための美術批評について論じたいと思います。美術批評も、一九五五年のものでなければならず、一九五五年の美術批評でなければならぬからです。

一九四七年、アメリカのウイナーによって創始された科学のあたらしい分野にサイバネティックス（Cybernetics）と呼ばれるものがあります。簡単にいつてしまえば——機械、動物、人間及び社会における支配と通信と統制との科学——ということになるのですが、物理学、数学、電気工学、通信工学、心理学、生理学、とおどろくべき多方面に通暁したウイナーがこれらを統一し、物理学とか通信工学よりも更に抽象的でありながら、技術的な具体的問題により密接に関連した科学を創り出しまし

た。人間の頭脳における神経系統の高度の働きを精密に分析し、サイバネティックスの理論によつてそれを技術的に再構成し、頭脳の働きに代えようというのです。ウイナーはライブニッツの「普通科学」をサイバネティックスの先駆的思想としています（学者によつてはデカルトの「動物機械論」あるいはコントの「実証的社会学」にこの理論の原型を見出しています）。その思想はともかくとして、問題は第二次大戦の軍事上の必要からある程度促進されたこの理論の実際上の応用にあるのです。

電子のメカニズムによる電子計算機、対空射撃装置、さらに暗号解読機、翻訳機械、ヴィジヴル・スピーチ（音を文字にかえる機械）あるいはホメオスタットと呼ばれる機械——総称して「思考機械」と呼ばれるこれらすべては、現代文明の産んだ最高の驚異というべきものかも知れません。たとえば、電子計算機は数年も要する計算を僅か数時間で解いてしまうことができるし、ホメオスタットに至つては生物と同様に外界が平衡状態にあれば安定し、平衡が乱されるとこれに適応するように動作するといわれます。また人間の神経系統における自己調節機能に対応するセルボオ・メカニズムによつて記憶力を持つ人造頭脳の製作。その上単に神経系統の外面的な運動に加えて内的な要素である現象の時間性の分析。いわゆる内面性の分析。人間の、手によつて働くこの「思考機械」は、いつの日か意識と同程度にも達し得るといわれています。サイバネティックスについて説明し過ぎたようですがもしも造形美術に対する審美的評価が——しかも資本主義社会にあつて、絵画が一つの機能になつてしまつてすれば——精密正確に行われねばならぬとしたら、この「思考機械」に優るものはないに違いありません。機械文明の脅威を説き、自己表現としての芸術の復活を強調しているレーヴィス・マンフォードにすればこれは殺人的提言でしょう。しかし心理学の発達によつて下意識や前意識の分析が精密に行われ、一方視神経の生理学的研究、色彩論、その他人間の美意識の分析が高度に科学的に行われれば、タブローのトーンとか、ヴァルー